

毛谷村問答

○ 川 尻 清 潭

△ 二代目実川延若

〈出典：『道頓堀』昭和2年4月号〉

○今月の『毛谷村』は誰の型で勤めるのです、又何か変わった趣向でも見せようと云うのでしょ
うね。

△私は歌六さんの六助でお園を勤めたのが始めて、其時に覚えたのですから、土台の骨組が
歌六さんで、外にいろいろを見て、自分の工夫も加えて居ます。今度は松島屋の追善興
行と云う所から、十代目片岡仁左衛門の型として伝わって居る、後の着付を黒天鷲絨に銀
糸の石持の紋付で演じようかとも思って、今その思案中です。

○私が知って居るのでは、前の間が荒い縞に飛白の肩入、後が浅黄紬の石持付ですが、団
十郎の六助は、微塵彈正が花道へ引込むと、すぐに納戸へ入って浅黄紬の石持に着替え
其上へ白の手拭を片襷にして出て、縁端へ来て折柄の鶯の音を聞き、三段へ腰を下し
て『刻限も違えず鶯がもう鳥屋に来た』云々から仏壇の方を一寸見返って『如才じゃごん
せぬぞや、必ず叱って下さるな』の台詞を云い、立って仏壇の花さしを手に取り、二重か
ら下りて、其処に置いて在る手桶の水を、枇杓へ汲んで先ず口を漱ぎ、次に花差へ水を足
し、片襷を外して濡た手を拭き、手拭は帯へ挿んで上へ上り、仏壇へ花を備えてから座
って、鉦を叩いて唱名をすると云う手順です。但し又着物は替えずにすぐ仏壇の前へ座っ
て、亡き母に甘えるように『必ず叱って下さるな』を云うのもある。其他幸四郎の六助は、
額を割られた血汐で着物が汚れた心で、微塵彈正が入るとすぐに着替えて仕舞って、跡で
大小 霰の袴 だけ着ければいいようにして居ます。

△私は後を浅黄天鷲絨の石持で勤めた事があります。天鷲絨を着るのは時代物の気分を出
す為で、関西で多く用いられるのは、人形から出た型であろうかとも思われます。併し今
度は私の考えで、最初試合の間を浅黄紬の石持でやるつもりです、それは試合をする場合、
言わば儀式的にも他所行きの着物を着替えて相手をする方が、本当であろうと思う所か
らの工夫です。そうして試合が済んでから横縞の平常着と着替え、最後にもう一度浅黄
の石持を着て、其上から袴を付けるのですが、それを舞台でやると長くなるので、納戸へ
入って鉄砲玉の袴まで付けて出ます。其間の舞台の明かないように、前から門口に乾し
てある、出世模様の着物をお園が取外して来て、小供に着替えさせると云う手順です。

○東京ではアノ袴を着る時の三味線を特に『六助の物着』と称する位で、それが特に作曲し
てある物だけに、それを下座に弾かして、大概はお園に手伝わせて舞台で着るのが例です。

△今幸四郎さんの話が出ましたが、私は今度微塵彈正に額を割られる事をやめようと思っ
て居ます。

○是非とも必要である条件はありませんが、本文には山賤が疵を尋ねる文句があつて『入口
の石に蹴つまずき、竹垣で摺破つてのけたのじゃ』とあります。此疵を受けて居るだけ、

跡の腹立ちが強くなると云う趣向でしょう、しかし必ずやらなければならないと云う訳もありません。

△話が飛びましたから、跡へ戻して順に云うと、花道から小石を入れたザルを引て小供が帰って来ます。六助が玩弄具箱を出して相手をしてやる、何を見せても気に入らない、そこで太鼓を叩いてやると喜ぶ、六助は興に乗って『これは天地をひろめ給いし神武飴』云々と、飴やの唄を歌い乍ら太鼓を打つ、小供が浮かれて踊ると云うのがあります。

○院本には無い事ですね、しかし其飴屋の唄は樋か菅原の飴売の浄瑠璃にも、似たようなのがあったと思います、古いものでしょう。

△今度はやめるつもりです。それから次ぎに、小供が膝へ寝て仕舞うのを、抱いて二重の上へ上って、寝かし付けて枕元へ二枚屏風を立ててやる。お園の出になって、お園が門口に干してある小袖に目を付ける、非人共が打って掛るのを追散らして、ポンと内輪に足を踏出して、それが自然に外輪に極ると云う見得の所、六助は其足へ目を付ける事にして居ます。

○お園は富十郎の型、彦三郎の型などが多く用いられて居ます。其処で六助が『見れば売僧の贗虚無僧、余つ程味をやりおるな』と咎めるのに対して、お園は女の調子で『ナーニ』と云って絃で『ツン』と受けさせてから、今度は男になって『贗虚無僧の売僧とは』と云わなければ、本当にお園を知って居るとは言わせない、とさえ伝えられて居る箇所です。其他『うつかり眺め見とれ居る』で白をズルズルと引摺って臂を突いて見惚れる所『何の家来の一人や二人どうなとしたが』で白を持ち上げて下に置く所、いずれも彦三郎の型として伝えられて居ます、それから舞台で髪を結直して、島田に結んで刀の下緒を根掛けに掛けるのは、これは富十郎の型だそうで、梅幸が鮮かな手練を見せます。

△あすこはいろいろにします。袈裟を取ったり、三衣袋を外したり、帯を前へ廻したり、六助の腰に挿んで居る手拭で姉さんかぶりをしたり、中々急がしい所ですから、私が歌六さんに教わって勤めた時のお園は、帯は前で結んで挿んだなり、後ろへ廻さないで女の姿を見せて行くと云うのが味噌で、又手甲などはサワリの中で取る運びになって居ました。白を持上げるのはよく見ますが、女の仕料としてどうでしょう。私のは『どうなとしたが、よいわいな』で、前に引出したのを邪魔な物を捌くように後へ押します、お園の衣裳は織物で縁を取ったような物を着たらと思います。

○東京では無地のあずき縮緬に黒の丸帯です。此方が跡になって色気が出るようです。梅の枝を折る時に緋縮緬の襦袢の肌ぬぎになります。

△六助が『何とでござんす』と大きく言って、小供が目を覚ました心に『われじゃないわれじゃない』と叩いて『梵論字どん』と云うのは歌六さんです。私は『何とでござんす』で、小供を覗いて一寸叩いてゴロリと腹這いになって『梵論字どん』を云います。

○団十郎は煙管で一つ下を叩いて前からの寝転んだ儘で『梵論字どん』と云ったように覚えて居ます、それからお園が短刀を抜いて斬かける、小供が出て抱付くのを小脇に抱えた見得は、誰でも短刀を見物席の方へ向けて振上げるのが当り前ですが、五代目菊五郎だけは、

見物席の方へ手の甲を見せて、短刀は後へ向けて見得する、其形かたちに女らしい優しさのあったのを覚えて居ます。

△話が入組んで前後する所もありますが、お園が斬って掛る六助は煙草入を投げる、又煙管で受ける、屏風びょうぶで止めて下へ飛下りて、其屏風へ臂ひじを突いた見得は紋切形もんきりがたの通りにします。

○団蔵はそれを皮肉に、裏向きの見得で、お園を見上げて極るのです、空釜からかまを焚かれるので、それを取るのに、熱い思入で動かし乍ら持って来て手水鉢ちゆうずばちへ入れて、両手で耳を押えるのは普通ですが、団十郎は無雑作に片手の袖口で持ちました『無理じゆうに上座へ押直し』は真ん中へ釜を伏せます。

△私のは下したへ下りてやります。下手しもてに直る白を横にして転がすので、お園はそれに押れる心持で跡さがへ下り、へたへたと坐る順序です。

○珍型ですね、その白の始末はどう付けるのです。

△後に自分で下手しもてへ引き摺って来て腰を掛けます。

○お園の仕科で『甘はたちの上うえを越し乍ら眉も其儘そのままいかな事、か』と『か』の字一字を言って『ねも含まぬ恥しさ』とチョボへ取って語らせるのがあります、場当りのようです、此件このくだりの少し先で『はっと許りにどうと坐し、拳こぶしを握り悔み泣き』の所、団十郎の六助は、右の手を大きく上うえへ上げ、それを又大きく下おろして、左の袖口を段々に捲まくり上げた儘、左の拳を握った無念なげなの形かたちが立派であった事、爰ここで搦からみが出るのを上手かみてのお園の方へ突やり、それを後向きでじっと見て居ました。

△六助が『彦山の麓ふもとにて』云々の物語は、此頃この大分略されるのを、私は院本通りそっくりやります。

○その物語の切れの『飛走とほしる涙はらはらはら、腹わたを断つ思いにて、慕い軟くぞ不便ふびんなる』の所、団十郎の六助は、お園の手を取って見交し、チョボの文句の止まりで左手の拳の甲で泣き上げました、老母が一間を出て台詞を言う所『師の後室こうしつとは夢いささか』で下手しもてへ退さがって裏向きの形かたちで居ます。『押戴おんこんきし猷こん々の』で二重あがへ上あって神棚かみの神酒かみを下おろして祝言しゅうごんの件がある、杣そまが斧右衛門を連れて来る、六助は下りてそれを見て、思入おもひいりがあって『アノ是これがフーンと眉まゆに皺しわ』の所で、跡あとずさりざりで三段のぼへ上あって腰を掛けるのが型です、又其先で『扱あは袖そでの母をたらし込み』云々以下の台詞は、頗る大時代に云って『おのれ此儘この』と切り『置くベーキーか』を甲かみで言ったなど、此段の台詞廻しが有名なものでした、其勢いで『胸も張り裂く怒りの齒がみ、庭の青石三尺（三寸と語らせた）許り、思はず踏込む金剛力』で、始めつか攬つかみ手拭を両手に握って引ちぎり、右の手の分を左の後、左の手の分を右の後へ投げ捨て、右足を踏出して、手先を開いた左手を前へ出し、右手を其下に受けた形の見得で、庭石あがが持上るのです。

△団十郎は、三段（俗に入齒）を踏込んだと聞いて居ますが、そうではなかったのでしょうか。

○サアそれが古くからの問題に成って居るのです。私は自分の目で儘にそう覚えて居るの

ですが、大道具師の方を調べて見ると、三段を詠えられた事もあるとの事で、両様ともに証人が出て来るのですから、或はどっちか工合が悪いので、半で取替えたのだろうかとも思われるのです。

△私は自然石の二段の上へもう一つ石臼を乗せた三段で、それを踏込む事にして居ましたが、跡で聞くと京極屋三桝大五郎も此式であったそうです。尚私は手拭をちぎりませんし、踏込みのとまりで見得も仕ないで、はっと心付いて足を戻すと云う行き方です。

○これまでに成るのが中々の長丁場ですから、東京では爰で一つ見物に活を入れる意味にも、大見得が必要として用いられて居る訳です。

△私のは後に三段を下り掛ける所で、チョボの文句の『ひらりと庭へ一足飛び』を活かして、踏込んだ場所に気が付いて、それを除けて飛下ります。

○大分理屈ですね、それでは天鷲絨を着なくともよさそうですね。

△イヤ其替わり小供が三段を下りる時に六方を踏ませて、見得もさせます。つまり小供の一つの演所にしてやるのです。団蔵は上手へ石燈籠を作らせて置いて、始め小供がそこへ小石を積んで遊ぶ事にし、六助は後に燈籠の添石を踏込んだ事もあったそうです。

○六助の台詞で『申受けての敵討ち、お袋、女房』と言い掛けて、極り悪そうに『お前さんもマお出でなさいまし』と云う所は大概変わりが無いようですね。

△お園の台詞で『油断をされな、こちらの人』と言って顔をかくす、私の六助はそれへ冠せて『アハハハハハ』と大きく笑う事にして居ます。

○『一旦こそは得心にて』の所、普通は此台詞の乗りを『一旦、こそは、得心にて』と云うように、区切りを付けて云うのが当り前なのを、団十郎は細かい区切りを付けずに、『謀り取ったる五百石、抱えられたも我情』と、一句一句を乗りの調子で続けて言い切りました。それを『岡太夫の乗り』と云って、或不平を持って関西から脱して、横浜へ来て居たその岡太夫に就て教わったもので『もっけの幸い塞翁が、うまう出合うた、母』と大きく云い『女一ほ』と『ほ』字を遠慮勝に言って、一寸襟の汗を拭く仕科をします。チョボの『天地に慙じる』では、指を開いた左の掌を、見物の方へ向けて高く挙げ『義の一字』で、これも指を開いた右の掌で、左の掌を叩き、右の手と右の足を一緒に前へ出して束に成り、右の手を二度挙げて居る左の掌の所まで持って行って上下して、股を開いてボンと箱に落ちた形ちで、今度は指を開いた右の掌を見物の方へ見せて高く挙げる、つまり始めとは正反対な形ちで、左の手を下へ添えた大見得をして極ります、絃が『チャチャチャチャチャ』と弾いて居るのに冠せ掛けて、又前と同じ乗りの調子で『鬼神なりとて京極内匠、我見る目からはへへ、ひとつまみ、フフハハハ』と爰で大きく笑って跡を素の台詞で『しかし御知行戴くうちは、殿の御家人討得難し』と云って『フム、ツン、フム、ツン』と一つ一つ絃で受けさして、再び乗りに成って『試合を願ひ勝つた上、直に仇討御免の訴訟、元首押さえて』でお園の方を見て『討たす』と大きく云い、次に老母の方を見て『討たしますせ』と軽く云い、更に小供に向かって『坊んにも討たせてやるわいな』と、手を叩いてはずんで両手で招く形をして『実にも鋭き魂を、見極め置

きし吉岡が、眼力違わぬ若者なり』まで、一杯に、六助は六方を踏んで元禄見得をして極めるのです。

△『しかし御知行戴くうちは』を言葉で云うのは、私もそうして居ます、それが団十郎の型である事は知りませんでした、どなたかのをを見た時、いいと思ったので、ずっとそれで勤めて居ます。それからお園が梅の折枝、老母が椿の折枝を臭れるのを、私の六助は、其時分に小供を白の縁へ乗せて置いて、両方とも小供に渡してやって、両手に折枝を持った儘の小供を、右へ抱上げて下手まで行って、足を割って、左の袖を返した見得で幕を切ります。

○折枝の取扱いはいろいろあります。梅と椿を右と左から両襟に差す人、梅だけを襟へさし、椿は手に持って居る人もあります、小供を抱くとお園が福草履を揃えて出す、そこへ揃みが出る、椿の折枝で払ってお園の方へやる、お園がこれを捉えると揃みの目が飛出すなどと云うのもあります。団蔵は幕外を付けて、抱いて居る小供を下ろす、小供が折枝を欲しがる、どっちがいいと見せると、両方呉れと手を出す、二本とも渡して、扇を開いて、嬉しそうに小供を煽ぎ乍ら、俗に云う『春藤』の鳴物大小入で入るのが、頗る派手でよかった事が言い伝えられて居ます。

△大体此位研究をして置けば結構です、しかし細目に渡って言えば、六助が太鼓を叩き乍らの物語『聞かしゃれや』で叩く事『なぶり殺し』で叩く事『尋ねてごんしたな』で叩くなどが急所である事、歌六さんは、話の間へ始終調子を付けて打込んで居ました事なども知って居ていい事でしょう。

○仔細に云えばお園の仕科に就ても、まだまだ随分話があります。

△明日もう一日話合って、完全な『毛谷村研究』を揃えましょうか。

○そうすればいいのですが、原稿の締切が廿五日なので、一度お断りをしたのを、『是非』と云う註文で書く事にしたのですから、すぐに送らなければ間に合わないでしょう、又此次に何か面白い狂言の時、充分にやりましょう。

(三月廿八日、東京歌舞伎座、延若子の部屋にて)